

令和6年度勝央美術文学館特別展
勝央町制施行70周年記念・勝央美術文学館開館20周年記念展

2025.
02.22 SAT
03.23 SUN

木村毅の旅

木村毅生誕130年記念展



木村毅原稿「木村毅特別通信員発」(1951)

【休館日】2/25㊄、3/3㊄、3/10㊄、3/17㊄
【開館時間】10:00~18:00(入館は17:30まで)
【入場料金】一般500円*20人以上の団体は2割引/大学生・高齢者(65歳以上)100円割引(要証明書提示)/高校生以下無料/障がい者手帳をお持ちの方および介助者1名は無料(要証明書提示)*割引の併用は不可
【主催】勝央町、勝央町教育委員会
【共催】公益財団法人 美術学術文化振興財団
【後援】勝央町文化協会、RSK山陽放送、OHK岡山放送、RNC西日本放送、KSB瀬戸内海放送、TSCテレビせとうち、テレビ津山、山陽新聞社、津山朝日新聞社、FM岡山、エフエムつやま

■関連イベント

記念講演会「木村毅の生涯と歴史的背景」

講師：保阪正康先生

時間：10:30~11:30

会場：勝央美術文学館

参加料金：本展の入場券が必要

定員：30名(事前申込優先)

申込・問合せ先：勝央美術文学館

Tel. 0868-38-0270

E-mail: shoomuse@town.shoo.okayama.jp

申込受付期間：1/22(水)~2/20(木)10時~18時 ※ただし受付期間中の月曜日は休館
メールの場合は件名に「木村展講演会参加申込」本文に①参加者名②電話番号をご入力ください

リモートによる講演です。

2/22 SAT



木村毅青年時代



保阪 正康(ほさか まさやす)

ノンフィクション作家・評論家

日本ペンクラブの会員。「昭和史を語り継ぐ会」を主宰。主に日本近代史(とくに昭和史)の事象、事件、人物に題材を求め、延べ4,000人余の人のびとに聞き書きを行い、ノンフィクション、評論、評伝などの分野の作品を発表している。

また、「医学・医療と社会の関係」をテーマにした作品や教育に関する著作も多い。

立教大学社会学部兼任講師、国際日本文化研究センター共同研究員などを歴任。現在、朝日新聞書評委員などを務める。

主要作品に、『昭和陸軍の研究(上下)』(朝日新聞社)『吉田茂という逆説』『秩父宮』『幻の終戦』(以上、中央公論新社)『東條英機と天皇の時代』『戦場体験者・沈黙の記録』(以上、筑摩書房)『瀬島龍三(ある参謀の昭和史)』『後藤田正晴(異色官僚政治家の軌跡)』(以上、文藝春秋)『昭和史がわかる55のポイント』(PHP研究所)などのほか、『安楽死と尊厳死』(以上、講談社現代新書)『大学医学部』『大学医学部の危機』『医療崩壊』(以上、講談社)『医学・医療界の内幕』(朝日文庫)『実学と虚学』『昭和史七つの謎』(講談社文庫)『昭和史七つの謎part 2』(講談社)『あの戦争は何だったのか』(新潮新書)、『愛する人を喪ったあなたへ』(朝日新聞出版)『昭和天皇』(中央公論新社)など多数。一連の昭和史研究で、2004年に菊池寛賞を受賞。

『ナショナリズムの昭和』(2016年11月25日刊 幻戯書房)で、第30回(2017年度)和辻哲郎文化賞受賞。第72回(2018年度)北海道新聞文化賞(学術部門)受賞。『石橋湛山の65日』で第1回(2022年度)石橋湛山和平賞。近著には『平成の天皇皇后両陛下大いに語る』(文藝春秋)、『戦時下の政治家は国民に何を語ったか』(NHK出版)などがある。現在、月刊文藝春秋で「日本の地下水脈」連載中。ラジオ出演 月曜「カルチャーラジオ 保阪正康が語る昭和人物史」(NHK)



■鉄道：JR岡山駅(津山線)→津山駅(姫新線)

→勝間田駅下車徒歩15分

■バス：中国ハイウェイバス

JR津山駅より15分/新大阪駅より2時間15分

《中国勝間田》下車徒歩5分

■自動車：中国自動車道

津山ICより約15分/美作ICより約10分/勝央ICより約5分

■飛行機：岡山空港から車で約1時間10分



勝央美術文学館
SHOO MUSEUM OF THE ARTS



勝央美術文学館
SHOO MUSEUM OF THE ARTS

〒709-4316 岡山県勝田郡勝央町勝間田 207-4 Tel. 0868-38-0270 Fax. 0868-38-0260 http://museum.town.shoo.lg.jp

木村毅生誕130年記念展

旅する 木村毅

今年度は、岡山県勝央町出身の文学者 木村毅

(きむら・き1894・1979)の生誕130年

にあたり、毅が国内外のさまざまな地域に向き、足で稼いだ知見を活用して多方面にわたって遺した功績を皆さまにご紹介する特別展を開催いたします。

毅は、高等小学校卒業の翌年にあたる明治42年に起こした大阪への家出騒動を皮切りに、国内外多くの地へ足を運びました。学生時代の東京、兵役時代の鳥取・朝鮮、洋行時の欧州各国、新聞社社友時代の国内各地などその足跡は枚挙に暇がありません。東京都参与時代には東京新聞の特派員という立場でサンフランシスコ講和会議の会場に立ち会い、日本の再独立の瞬間を目の当たりにし、その様子を日本へ伝えていきます。毅は著書で国内全ての都道府県と、豪州・南米・南極を除く三大陸に足を運んだことを記しています。これらの体験が、毅を一出版社の編集者に止めず、作家・評論家・研究者・文学史家・活動家など多様な分野で活動することの礎となりました。本展では毅の「旅」に注目し、彼がどのようにしてその知見を深め、「博覧強記の文学者木村毅」と呼ばれるに至ったかをご紹介します。



木村毅(きむら・き) 1894・1979 〈文学者〉

明治27(1894)年2月12日、現在の岡山県勝田郡勝央町岡に、町長を務めた梶、きくの子として生まれる。幼少期から文学を愛好し、『少年世界』へ投稿を始め、熱心な投書家となる。さらには大人たちも肩を並べる『文章世界』で一等を獲得。早稲田大学英文科卒業後、隆文館や春秋社の編集部で企画・評論・翻訳に携わる。関東大震災直後、29歳の時に小説「兎と妓生」が大阪毎日新聞(夕刊)で連載される。大正14(1925)年『小説研究十六講』を出版し、若き日の松本清張に影響を与え、菊池寛に大絶賛されるベストセラーとなる。出版企画では、改造社・新潮社に出版アイデアを提供し、円本ブームを呼んだ。その他、明治文化の研究をはじめ、様々な分野に関する著書を発表。『ラグーザお玉』などで、大衆文学に実話文学という新しい領域を開拓した。昭和24(1949)年、東京都の参与に就き、一時文壇を離れるものに復帰。明治百年記念では内閣委員に任ぜられ広報部長を務めた。著書は260点を超える。昭和52(1977)年、勝央町公民館前庭に木村毅文学碑が建立された(後に勝央町役場駐車場前庭に移設)。昭和53(1978)年、「明治文化研究者として一時代を画し、文化交流に在野からいくたの貢献をし、常に時代の先導的役割を果たした」として、第26回菊池寛賞を受賞。昭和54(1979)年9月18日85歳で逝去。翌年、勝央町名誉町民に追贈される。

木村毅 パスポート (1928,1951,1961,1964)



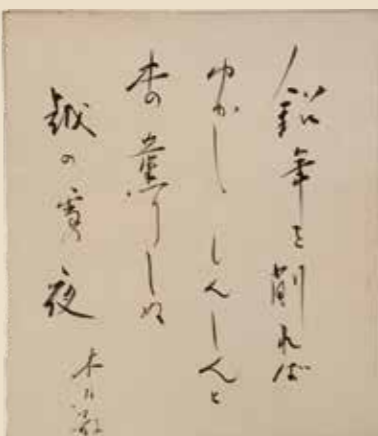
木村毅 色紙



木村毅 平素使用の硯



木村毅 色紙



木村毅 色紙



木村毅『私の文学回顧録』(青蛙房、1979)



ホセ・リサル騎士司令章 (1964)



従軍記者の腕章 (年代不詳)と辞令 (1942)



木村毅 懐中時計